

建城叢書

四拾四

特別
14
696
139



696
139



目錄

水虎追考

音名殘書

異燕集

清器考

雷神考

大道寺友山若松之五七二
雷鳴傳之書有且字云ナリ



如
玉口
文庫

わがあつちうは是をさくく向はこゝろは後成よるまう
後成よるまうは是をさくく向はこゝろは後成よるまう
花押しをさくく向はこゝろは後成よるまう
川を流るる水は其の源をたづねて海に注ぐ
貞享五年甲申の春三月廿二日 書天百回
見聞集 寶暦五年の 野火 河内 瀬川を
流るる水は其の源をたづねて海に注ぐ
人をして古の人も
とてさくく向はこゝろは後成よるまう

○雨意自語

此にぬるの流りりる湖水のつらう水虎谷のつらう
流しをわくく向はこゝろは後成よるまう
人の門をたづねて海に注ぐ
流るる水は其の源をたづねて海に注ぐ
人をして古の人も
とてさくく向はこゝろは後成よるまう

こく日兆

○回書

此のちのちまうまうの初月来流りてこの国の国を
流るる水は其の源をたづねて海に注ぐ
人をして古の人も
とてさくく向はこゝろは後成よるまう

カワの害も多し身少落套中巻は落葉の方ハ河伯の邪
也多し金鑿の煎湯を用ひ神効有りて試せし
手指と截断せしむ接ぎ藥の方カワより受たるは
と云ひし者ハ事ありて一車左に堅固廣集卷六
云耳談。黃波江ノ刺解銀卦并過盜截去二指抵京
已五日矣延醫但求已痛有祝禱我門下醫入曰
是可續也断指幸為從人拾得即取合之骨
塗藥仍灰以薄板戒二十七日勿近水及期果合骨伸
如故但有紅線痕頗痛得三十金酬之兼有某方用片
勝象牙末降香諸料一かきさぬ事未だ出づりも
おのれ利根の用いしと云ふ事ありて
おのれ利根の用いしと云ふ事ありて

京師橋のつゝ室所の東北の直の教書石の片割と
傳つる石を自らとて所置に必死とて
やまじ人のまゝに痛くさし
加賀の松の城の北一むらの竹を
のりて十餘の石の中一の石の上を
ちの竹のまゝにまゝに
のりて松の城の北一むらの竹を
其石のまゝにまゝに
おのれ利根の用いしと云ふ事ありて
おのれ利根の用いしと云ふ事ありて

大便の事、此れ腸中をさしてけのやうにけりて、
 之をけりてあそびにけりて、お親多き事、お殺し、お右の
 虫、見申す、此れ、長き、氣を、かき、けりて、



長一尺二寸

額、小角あり

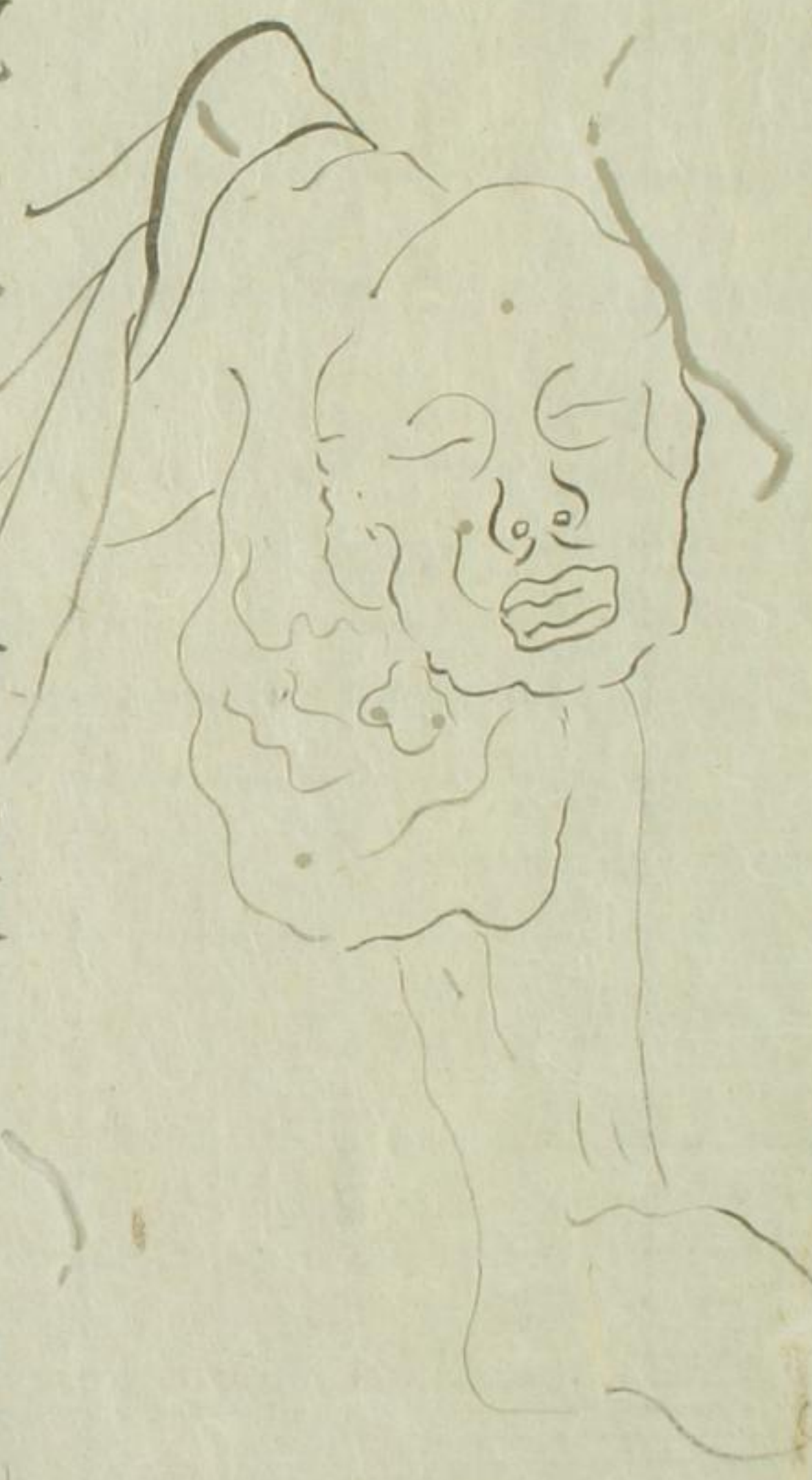
ア、二、三、見

舊聲入門本草病論

右見蘭雜録、二、二、又、監、尾

○文政五年夏、本邑、曾、後、菴、文、助、事、有、瘧、之、患、六月、廿、四、日、瘧
 潰、二、癩、臭、之、膿、四、出、瘧、又、稍、愈、由、其、子、茂、年
 異、之、是、語、以、文、助、之、向、曰、信、其、長、子、全、愈、之、事、
 首、が、辨、籍、並、入、蓋、是、膏、此、臭、好、其、沙、羅、多、
 其、皆、を、頭、を、之、然、を、食、せ、が、り、救、月、今、お、辨
 具、全、す、何、れ、也、予、文、助、の、言、を、益、を、異、を、嗜、を、夫、熱、を
 後、食、を、靡、を、是、を、咽、安、を、辨、具、全、を、以、ん、入、の、膿、
 食、を、受、を、存、を、之、を、背、を、り、出、を、け、り、也、釋、堂
 小説、其、の、症、を、載、す、予、斯、疾、の、事、を、傳、を、是、也、
 之、り、を、之、を、説、し、も、世、の、事、前、症、也、傳、を、之、の
 概、を、思、説、を、之、を、以、も、文、助、也、我、不
 備、也、由、之、其、事、を、詳、し、し、也、
 備、也、吾、爾、小、年、清、光、記、筆、延、海、佐、郎、

○仲皇の怪病の事並に記又は載す 本文は漢語を以てし今見ると其の
 此の如く記す所を賢る



至久月沈先生嘗て有る語曰祖考華君の曰叔東村赤
 一高有年于丑、膝下腫生、遊漸り、大瘡、潰、
 菜、腫、三、兩、處、其、後、置、略、入、面、後、瘡、時、有、
 痛、滿、此、常、瘡、也、其、痛、暫、退、少、選、其、再、

痛、初、の、如、夫、入、面、の、瘡、因、り、其、証、満、り、此、の、症
 入、面、瘡、也、微、も、亦、可、が、人、牛、蓋、瘍、科、の、諸、編、を、翻、
 瘡、名、極、り、難、し、究、竟、も、其、病、一、因、に、係、り、
 肝、の、部、分、及、び、瘡、形、形、を、其、方、を、別、つ、
 如、り、而、是、也、今、若、し、卵、中、元、の、理、を、一、高、密、
 治、せ、り、
 上、胸、を、生、ず、潰、れ、膿、を、流、し、
 累、年、に、位、
 或、毒、中、の、浴、刺、血、を、
 亦、數、回、在、再、
 其、後、年、月、其、腫、形、を、
 其、後、也、
 今、年、
 止、
 骨、と、
 張、起、

右ハ方官の用ハ山岳被流者為將ハる可也

齊簡 唐大和御宇ハ長クシテ八十年

右ハ方官の用ハ山岳被流者為將ハる可也

編纂云々ハ有リテ之ハ方官の用ハ山岳被流者為將ハる可也

○西洋東則也東則也一説云我朝高野山少縁地勢畫表曼陀羅長

僧則律宗呼律司後架破也以上下集之三

○雲霧清土初聖丹義友祥常使持節

○小兒の承之身丹々々ハ之使心々々々々

奥細の茨菰葉

○古人觀望者周其寢廟又適其偃焉偃者則也

則雖穢濁之所而古人重之今天江以北人家

不復作廟矣古之人若使必如則如晉景公如

則陷而卒漢武帝如則見衛青北齊之宣於率

相揚悟進則筆非如今淨器之便也但江南作

廟皆以與農夫交易江北無水田故莫無所用

俟其地上乾然後和土以混田京師則停溝中

俟春而後發之暴日中其穢氣不可道入暴觸

足輒病以何如奏廟之便五篇祖

武帝如則見衛青解者必由焉之說此殊可笑

史之記此政甚言帝之慢大臣以見其敬黯耳

若非濶則史何必書衛青公主馬前奴也宣郎

尊貴帝狎之及矣文宣令宰相進廟筆時武帝之

○天正九年六月廿二日野末ノ庄山上ニ大石有其一石上ニ如鞠
圖ノ火ノ光輝事ニ三里ヲ照ル其火石ノ燃ニ形ノ草木ニ
甘ニ非火ノ而ニ赫ニタリ人母是ヲ怪ニ群集シテ神禮ナリト
拜ス其火中ニ龍ノ形ニクシク人敢テ不近者或人來テ曰是天卷
ナリト水一桶ヲ掛ケシハ太鼓ノ如ク鳴出テ近所ノ石上ニ飛テ而架
輝ケル一月有テ後空星ノクシハ此火虚空ニ飛テ空中ニ雷電ト
成テ天ノ地ノ響ニテ威ヲ震

故時因縁集

○慶安年中出雲ノ太守直政ノ家臣乙部九郎兵衛某ガ曰世人皆
後世ヲ願フ成佛ヲ望ム吾雷電ト成ヘシ若雷ト成則ハ吾子
孫必後世ヲ願フ哉ニ雷ト成ト云テ泣石動雲天龍ノ号又
寂後ニ至テテ回空天ニ動雲ト唱テ死ス頃ニ暮禮ノ管トナ

雷雨伏之後、雷ヲ動ス其後三日七日世五品十九日百箇日ニ
甚雷電々乃長驚後世ヲ願今日至テ動雷命日ニ雷動セ
故ニ此日諸用ヲ止口上

○天正元年和列龍田ニ雷火落テ又損シ家ヲ燒故實ヲ能知
民音回聲ニ呼テ曰古々心心思テ不知當哉龍田ト云如何下云ハ
雷鳴ヲ靜テ空虛ヨリ能覺テテ故ニ給是後田畠存ヲ損シテ云ハ
許曰傳聞大和國龍田ニ音音雷火落テ云云離シテ通カヌ天ヒ終ニ
章下成テ久シク雲ノ便ヲ待テ入界住テ人苦責テ云サレバ呼悲農夫
憐テ養ヒ爲子其恩愛ヲ不忘テ旱魃ノ時ハ雨ヲ降ラセテ雨止風
息息俗ナリ年ヲ經テ三皇子曰吾天ニ可敬敬可敬皇未代及テ厚恩余
忘不可於此存守田畠不可忘謂捨爲小龍天上ト云
是ヨリ此所ノ農夫旱魃ノ愁ナシト教業ヘテ豊ナリ
故ニ龍田ト号シ此日縁上ヘ雷守テ赦免テ

乙フトナリ口上

○羊山抄聞ニ水天中納言光國卿カ三月ハ無雷月也
ト上古ノ書ニ皆雷サカミト云ナリ十月ハ極陰ノ月

ニテ無雷月ト云事能合ヘリト云

○論語郷黨篇曰迅雷風烈必變又曰未喜語曰所以敬天
之怒ト。身文ニ身ノ天ノ心ヲ能ク知テ云ハレ推量ハ
知ラズ天ニ人ノ如ク怒ラバ怒モ有ベシ變モ有ベシ暗天ハ樂ノ
將ハ且雲ハ愁ノ將ハ雨フハ愁ノ將ハ雷ニ霜ハ目クハ
鼻クハ電雷ハ身ノ始レテ理ヲ究メス衆昧ナルニ
是等ノ事ヲ明メ知ラズ

○北窓瑣談ト

不修のあつた祥符八年の春二月改を雷西北極の上を
例に謝仙火の字を書き度唐の年勝子の京令暮の
是と列を零度の何れか何れ仙姑と著すつひに曰謝仙
火の雷部の大徳也兄弟二人若三人形質玉の如く好
鐵筆と以て之を弄する事下界を以て等しく如く
是と誇る事よく外を以て後岳陽橋上其墓列を元豊
二年横火とす又の碑碣悉煨燼と云ふ惟此二字を
少損か入る事少く有る事と云ふ如くあつた事と揚
雷雅を述べて之を氣か外に書かんと云ふ事と云ふ
元道家の并ぬ事か如く多し又釋家王舎城の
二の事と云ふ火災記と云ふ事と云ふ
○古事海府春雷普浴たるは雄雷早の印其鳴候
は雄雷の印は水氣多しと云ふ雄雷

○市井雜談集三列吉田林自見正森輯 其予老年上列様名山を
権現の社多れの中小雷の類は号と云ふ物長或人守り
右の事も昔も兼應三冬二年武列様津那宮の村の
草所の大雷の將大木の氣かあつた凌かあり又雷中
は雷の類も多し尚ほ物と云ふ事の本草に霹靂介
雷環の類も多し濕土金石の氣上り天氣下り將雷火
鑄の類も多し造化の徳も多し其れを以て雷の形か
阴阳相激する聲と云ふ雷の聲有ると云ふ電の光と云ふ
又霹靂の雷の急は激と云ふ俗に大雷を云ふ或は
霆の字ハ急雷の聲と云ふ雷の聲は將人云ふ其激聲
震する事と云ふ雷の聲は將人云ふ其激聲は
つれづれに雷の支那雷列か又云ふ事と云ふ雷の聲は將人
云ふ事と云ふ故に毎冬彼雷と云ふ事と云ふ

社にひくそびしくそまめあつて雷鳴の称甚き其の夜
 香未雷也火夫いづちハイツノカリツ子ノ音便是紀ニ云
 軒遍突智要垣山姫生稚三屋又ニ加茂の神ハワケ
 イカツ子ノ子ナリト云ハ思ヒタリイタスベシト云

○雷臍カウシと云ふは雷の臍と云ふは雷の心也
 雷雲の將 依依と云ふは雷雲の將也
 雷雲の將 依依と云ふは雷雲の將也
 雷雲の將 依依と云ふは雷雲の將也

○傍玉有年圓引神の記をあるものにてあはれくそ中
 中ノ玉有年圓引神の記をあるものにてあはれくそ中
 中ノ玉有年圓引神の記をあるものにてあはれくそ中
 中ノ玉有年圓引神の記をあるものにてあはれくそ中



此の如く云ふは五月十日の龍引九ノ布宜
 塩宮へ入るる雷雲の記也云々

樹所夾狂風烈日眾披靡不敢近狄仁傑為都督
逼而問之乃云樹有年龍所由命我逐之落勢不
堪為樹所夾若相救者當厚報德仁傑乃命
鋸匠破樹方得出夫雷公被樹夾已異矣能與
以言尤可怖也又葉遷招曾避雨示救雷公於
夾樹間翌日雷公投以墨象與仁傑事政同立善組
雷之擊人多由龍起或因雷自地中起偶然值
之則不幸矣一云年龍憐於行雨住佳逃於人
家屋壁及人耳鼻或牛角之中前由令雷公撰
之去多致霹靂然亦似有知不妄擊者野史載
柴再思當大雷時老坐不動忽有四人昇其狀
出度中俄而大震龍出僧道宣右手小指上者
小節如扇因雷鳴不已出子戶外一震而失半

指又有藏若僧耳中者出而僧熟睡不覺余從
大父廷柱幼時婢抱入園中雷下擊婢婢走雷
逐之入室安見狀上而婢震死兒無恙也東郡
馬生雨賦言其母一日雷速戶外念東室漏後
視之大震一聲有龍自其枕下出穿屋而升枕
掀地上此非天之年亦雷及龍之有知也上
○風俗通云雷不蓋醬雷聲者陽氣之發也收斂
之物觸之輒震動令人新死未斂者聞雷聲屍
輒漲起是也上
○論衡曰畫工圖雷公狀如連鼓形一人推之可
見漢時相傳若此然雷之形入常者見之者大
約似雌雞肉翅其響乃兩翅奮撲作聲也宋儒
以陰陽之理解釋雷電此誠可笑夫既有形有

聲春而起秋而整其為物類審矣且與雲雨相
挾而行又南方多而北方少理之不可曉者滿
曆戊戌六月余在真州避暑於天寧寺大樹下
旁有浮屠卓午方祖跪與客對奕忽雷震一聲
起於坐隅若天崩地裂客驚仆地余仰視見
一簇從塔頂直入雲中塔角一磚擊碎墮地
是日揚州相距六十里亦震死一婦人

○雷之擊人也謂其有心耶則枯樹畜產亦有震
者彼寧何罪謂其無心耶則古今傳記所載所
擊者皆兇惡淫盜之輩未聞有正人君子死於
霹靂者惟王右軍幾罹其禍卒亦獲免非亦擊
也蓋其起伏不恒或者卒遇之者至於擊以則
非天故不足以動天之怒耳然而世之兇惡淫

盜者其不盡擊何也曰此所以為天也使雷公
終日轟然搜久而擊之則天之威蕩矣聖人凡
雷風烈必變不可以自反無故而遂不敬天怒
也

○余舊居九仙山下危屋外有杉樹每歲初春雷
必從樹傍起根枝半被焦為色如炭云居此四
年雷凡四起雷之擊伏似亦有定所也

○今嶺南有物雞形肉翅秋冬藏山中掘者遇
之轟然一聲而走土人遂得殺而食之謂之雷
公余謂此獸也以其雷故名之耳彼天上雷
公人得而食之耶

○濃別名子見說今嶺村有雷公
濃別名子見說今嶺村有雷公

○和漢三才圖會

雷

雷神 雷公 雷師 雷師

回作雷又省作雷也

和名伊加豆知 奈依加美

雷

雷疾者曰霆

曰霹靂和名伊加美止介

雷聲曰殷雷

詩召南云殷其雷又殷殷者盛貌後加石

月令云仲春雷乃發聲仲秋乃收聲釋名雷破也如轉

物有新破大孔雷聲响烈者雨雖大而易過雷聲殷然

响者卒不晴雲中有雷三日陰雨

理學類篇云胡氏曰雷霆者古人未之言然先達大儒亦

嘗明其理蓋天地間莫不有陰陽聚散蓋關可以神言

不可以形論異端所謂非如龍車石不鬼鼓火鞭怪誕之

難信故其言曰陰陽凝聚而在陽內不得出則奮擊為雷

霆聲陽也光亦陽也光發聲隨之震雷交至則必有雨震

不雷電不震則無雨也世人所得雷亦此猶星隕成石亦

水中則陽逼于陰為殷殷聲陰吸于陽雷亦減後降亦

如兩性往有人是雷臨僉曰大可徑五寸火塊也如砲

矣之勢而有鹽硝氣極暑火莫其所中樓屋擊技大

木折裂而雷塊不碎入水亦不沉也止按一重次轉稍

欽其雷礪礪奔走負昇天之便如植一株樹一尋在則

捲上星雲掩下葉及得外騰其墮處必有脫毛及爪痕

則全體火而為獸之居必矣陰中則燧火中不可得見

故古人全稱雷本形者疑如小貓者字爪痕大者

燔火也

古謂雷無形者非也又有形如六畜如雌雞者非也

偶則教人有補雷者然此非真雷也雷墮時有會獸所

劫於霹靂由俱墮者屬補之若夫異品則以為雷之類

矣蓋和名伊加美擊也

太平御覽云秦二世元年天無雲而雷雷陽也雲陰也象
君臣也今不恤人臣致之故然也

日本紀舒明天皇十年正月十二日無雲而雷

△按久月非常之雷而不祥也

風俗通云雷不共雷積收斂之物積定輒發動今人新死

未斂者用雷死輒漲起是也

論衡云子路感雷而生之謂好惡死孔子每遇雷鳴忠則坦

△按有怯弱人知不懼雷鳴者強氣人及捨世老比丘等

聞雷則恐右至絕人者皆天性所以然也

五雜俎云嘉榮草羊腹之者不畏雷霆

△按嘉榮草不戰其形也今有草若加未止此其類子

俗之波布天古布良似相桑此二種亦能防雷霆

而未知其故也日本紀謂伊弉諾尊未禱實以擲雷者

天者氣而非形偶墮地則成形然悉皆雷聲折樹

殺火者陰陽怒氣也九天地造化之逆苟不以理推則必入幻

怪說不能終明字△按此說似是而非

玉樞經云東方有光明雷王若阿揭多有南方者若阿薩魯

帝有西方者若王多光或有北方者若阿薩多聞是者字

及知方處者令無一切怖畏雷電災

日本紀伊弉諾尊按伊弉諾尊過愛智為三段其二段是

為雷神△按伊弉諾尊

夫木而也伊弉諾尊夫木而也伊弉諾尊

天文書云雷為陽氣而雷火者其地上下有日行近天頂

人為居之地上為天頂照地或發則有雷日為火母下火騰蹕挾水

土之氣合通衝通雲中都被重雲團團四圍以濕之氣也

沖のたつたつて... 由しはるをく脚前
かきまふ山... けりてまゐるにけりまぬ

○水のもろの...
水のもろの...
水のもろの...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

○雷古の...
雷古の...
雷古の...

